１９１０．１～

ロシア社会民主労働党中央委員会ロシア国内委員会　　第 17 巻 P599　事項訳注

1908 年 8 月に中央委員会総会によって確認され、1910 年まで存在していた。はじめの構成員には、ボリシェヴィキ、メンジェヴィキ、ポーランド社会民主主義者、ラトヴィア社会民主主義者、ブンドから、各一名がはいった。

1910 年に、中央委員会の 1 月総会で採択された中央委員会規則によって、この構成員は七名に拡大され、第五回（ロンドン）大会で選出された中央委員四名と、非ロシア民族組織の代表三名がはいることになった。しかし 1 月総会のあと、この国内委員会の活動を組織することは不成功におわった。解党派メンシェヴィキがこれに参加することを拒否したのである。レーニンは、解党派のかわりに党維持派メンシェヴィキを入れることを指示したが、調停派の中央委員（ノギン、ゴリデンベルグその他）は、この指示を遂行しなかった。

1910 年中と 1911 年のはじめに、ロシア国内で活動していたボリシェヴィキ中央委員は、すべて逮捕された。

レーニンのこの手紙（1910 年 12 月半ばに国内委員会へだした手紙）は、警保局関係文書で発見された写しによって印刷されている。なお表題はマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所がつけたものである。

フペリョード派（「フペリョード」グループ）　　第 17 巻 P600 事項訳注

召還派、最後通牒派、創神派、経験一元論者（マッハやアヴェナリウスの反動的な観念論的見解の支持者）の反党的グループ。1909 年 12 月にア・ボグダーノフとゲ・アレクシンスキーのイニシアティヴによって組織され、『フペリョード』（『前進』）という機関紙をもっていた。1912 年に、フペリョード派は解党派メンシェヴィキといっしょに、トロツキーの組織した共通の反党的ブロック（8 月ブロック）に結合し、ボリシェヴィキに反対した。

このグループは労働者のあいだに支持をえることができなかったので、実質的にはすでに 1913 年に崩壊した。そして 1917 年の二月革命後に最後的に公式に崩壊した。

ロシア社会民主労働党中央機関紙、『ソツィアル-デモクラート』（『社会民主主義者』）

ロシア社会民主労働党の中央機関紙、非合法新聞。1908 年 2 月から 1917 年 1 月まで発行されていた。第 1 号はロシア国内で出されたが、その後、出版は国外にうつされ、はじめはパリで、のちにはジュネーヴで発行された。中央機関紙編集局は、党中央委員会の決定によって、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとポーランド社会民主党の代表から構成された。『ソツィアル - デモクラート』には、レーニンの論文や記事が 80 以上も掲載された。編集局内で、レーニンは一貫したボリシェヴィキ的方針をまもってたたかった。編集局の一部のボリシェヴィキ（カーメネフとジノーヴィエフ）は、解党派にたいして調停的な態

度をとり、レーニンの方針の遂行を挫析させようと試みた。メンシェヴィキの編集局員マルトフとダンは、絹集局内ての活動をサボタージュすると同時に、他方では、『ゴーロス・ソツィアル-デモクラータ』(『社会民主主義者の声』) で解党主義を公然と擁護した。レーニンが解党派にたいして容赦ない闘争を行った結果、1911 年 6 月に、マルトフとダンは『ソツィアル-デモクラート』編集局から退いた。同年 12 月から、『ソツィアル-デモクラート』はレーニンによって編集された。この新聞にはスターリンの論文も多数発表された。 第 17 巻 P600 事項訳注

中央委員会在外ビューロー 第 17 巻 P601 事項訳注

中央委員会ロシア国内ビューローに従属する在外全党代表機関として、1908 年 8 月に中央委員会総会によって創設された。1910 年 1 月の中央委員会総会後まもなく、在外ビューローのなかで解派党が多数をしめるようになり、在外ビューローは反党的勢力の接近する中心になった。在外ビューローの戦術が解党主義的であるため、ボリシェヴィキは 1911 年 5 月に、よぎなく自分の代表（アレクサンドロフ――エヌ・ア・セマシコのこと）をビューローから引きあげた。その後、ポーランドとラトヴィアの社会民主党の代表も引きあげられた。1912 年 1 月に在外ビューローは解消した。

ロシア社会民主労働党第六回（プラーグ）全国協議会 第 17 巻 P620 事項訳注

1912 年 1 月 5 ～ 17（18 ～ 30）日にひらかれた。協議会には 20 以上の党組織が代表をおくった。これは形式上は党大会の意義をもつものであった。レーニンはここで、協議会の成立の辞を述べ、現情勢と党の任務について、国際社会主義ビューローの活動について、飢餓との闘争における社会民主党の任務について、組織問題について、中央機関紙『ソツィアル-デモクラート』の活動について、その他の諸問題について報告した。協議会召集のためのロシア組織委員会の活動については、オルジョニキッゼが報告者となった。レーニンの提案によって、協議会はロシア組織委員会の遂行した活動の巨大な意義を指摘した。

協議会は 23 回の会議をひらいたが、そのうちの 5 回は地方からの報告の審議にあてられた。ペテルブルグ、エカテリノスラフ、ニコラーエフ、スフーミ、ポーチ、バトゥーム、クタイス、チアトゥル、、ゴーリ、チフリス、バクー、オデッサ、ハリコフ、ドン河畔ロストフ、キエフの諸組織の活動状態についての報告にかんするレーニンのメモが保存されている。日程の重要問題についての決議草案はレーニンが書いた。

協議会はつぎの人々から成る中央委員会を選出した。――レーニン、スターリン、オルジョニキッゼ、スヴェルドロフ、スパンダリャンその他。スターリンとスヴェルドロフは流刑中だったが、不在のまま中央委員にえらばれた。ロシア国内での革命活動を指導するための実際的中央部である中央委員会ロシア国内ビューローが創設された。

この協議会の決定によってメンシェヴィキは党から追放され、一つの党内でのボリシェヴィキとメンジェヴィキとの形式的統一はそれで永久になくなった。プラーグ協議会は新しい型の党、レーニン主義の党、ボリシェヴィキ党の基礎を据えた歴史的な協議会であった。この協議会の意義については、くわしくは『ソ同盟共産党小史』第 4 章 5 を参照。

『プラウダ』（『真理』）

ボリシェヴィキの合法的日刊新聞。1912 年四月二十二目（五月五日）に創刊された。

創刊以来たえず警察から追及され、前後八回停止処分を受けたが、そのつど新しい名称で復刊された。しかし 1914 年七月八（二十一）日についに禁止された。1917 年の二月革命後に復刊され、三月五（十八）日からは、ロシア社会民主労働党の中央機関紙として発行されるようになった。七月事件で本紙は禁止されたが、その後臨時政府の追及を受けながらも、『小型版「プラウダ」』、『プロレタリーー』、『ラボーチー』、『ラボーチー・プーチ』と名称を変えて、発行されつづけた。十月二十七日（十一月九日）から、ふたたび『プラウダ』という名称で発行されている。現在『プラウダ』はソヴェト同盟共産党中央委員会の機関紙である。　第 25 巻 P538 事項訳注

第ニインタナショナル国際社会主義者臨時（バーゼル）大会

1912 年 11 月 24 ～ 25 日（新暦）にバーゼルでひらかれた。開会の日に、大勢の反戦デモンストレーションと国際的な反戦抗議集会がもよおされた。第二日の会議で、労働者が戦争の危険と革命的にたたかうためにその組織とプロレタリアートの威力とをもちいるべきことを訴えた、有名な「バーゼル宣言」が、満場一致で採択された。

第 18 巻 P694 事項訳注

1912年11月15日のペテルブルグのデモンストレーション

ペテルブルグの区および企業のボリシェヴィキ代表のイニシアティヴで組織された。国会開会の数日まえから、11 月 15（28）日に一日の政治的ストライキを行い、またタヴリーダ宮へむかってデモンストレーションをすることを労働者に呼びかけたビラが、企業でまかれていた。解党派は『ルーチ』紙上でデモンストレーションに反対していた。11 月 13（26）日に第四国会の社会民主党議員団は、ペテルブルグ委員会、『プラウダ』編集局、解党派の指導的中心である組織委員会、解党派の新聞『ルーチ』の各代表の参加した会議を召集した。ボリシェヴィキは会議の席上、黒百人組的国会の召集の日をストライキとデモンストレーションで記念しようという労働者の提案を支持したが、解党派はきっぱりと反対意見を述べた。この会議のあと、社会民主党議員団は、労働者にストライキを呼びかけたビラはペテルブルグの権威ある社会民主主義グループから出たものではないという、政治的に誤った声明を出版物紙上にのせた。しかし、これらの解党派の反対行動や議員団の政治的誤りにもかかわらず、開会日には一万の労働者がストライキを行った。また多くの企業では移動集会がひらかれ、労働者は『ルーチ』のボイコットを決議した。

デモンストレーションのあとで、ボリシェヴィキ議員は労働者集会で自分たちの誤りをみとめた。　第 18 巻 P695 事項訳注

ツィンメルヴァルド派の第二回国際会議

1916 年 4 月 24 日～ 30 日（新暦）にスイスのキンタールでひらかれた。議題はつぎのとおりであった。――戦争終結のための闘争、講和問題・議会活動・大衆闘争にたいするプロレタリアートの態度、国際社会主義ビューローの召集その他。この会議では、ツィンメルヴァルドにおける第一回会議のときよりも、左翼は強力であった。レーニンは、社会平和主義および国際社会主義ビューローの活動を批判した決議をとおすのに成功した。キンタール会議は国際主義的分子の分出と結集を促進し、これらの分子から、のちに 1919 年に第三インタナショナル（共産主義インタナショナル）が形成されることとなった。しかし会議は、帝国主義戦争の内乱への転化、戦争における自国の帝国主義的政府の敗北、第三インタナショナルの組織という、ボリシェヴィキの政策の基本的命題を採択しなかった。　第 22 巻 P434　事項訳注